

家庭内暴力で猛烈な反抗に走るということも考えられる。

また、今まで述べたような少子化パーソナリティが晩婚化に貢献しているとも考えられる。子どものままでいたいという考えが、未婚につながる。少子化は心理的には嫌子化ということである。子どもは人間を嫌ってもよいのだということを経験しているのかも知れない。

ところで、今の子どもは昔の子どもと比べてよくなったと誉められたことがかつてどれほどあったらうか。さらに、人口少子化は批判する大人の割合が多くなるということなので、子どもの特徴に対する多くの批判的言説は若干さしひいて考えなくてはならないだろう。

#### 4. 地域社会への影響

少子高齢化の進行は児童公園を老人公園にする。しかし、子どもたちの遊び場、遊び仲間の減少という社会状況の中で、児童育成の拠点を担う児童館の活動が強化される。

少子化に加え、休日返上の子どもたちの塾通いや習いごとで、地域の行事への参加者が減っている。子ども会そのものの加入も減少傾向にある。それに伴って役員をする大人も減り、毎年なかなか役員が決まらない。団地では子どもを通じて親同士が知り合う機会が少なくなっている。子供会の衰退と並行して団地の主役が高齢者に代わろうとしている。ボーイスカウトも80年には団員数が30万人を超えていたが、その後は少子化、塾通い、遊びの多様化などの影響で、やや減少傾向にある。このため、ボーイスカウトは各都道府県単位で拡張委員会を設け、年齢差を超えた交流ができるとPRしている。

年中行事も様変わりしている。七五三も神社によるが、参拝数が減っているところが多い。ただ、子どもが「宝」となり親、祖父母同伴のケース、時期をずらしてのお参りは増えている。また、成人の日は、毎年、少子化のため新成人の数は増えそうにないと報道され、行事の規模が縮小されている。献血を行う十代の率は低下しているが、「はたちの献血」をする成人がそもそも減少している。伝統行事も継承者が少なくなり、男子のみで行っていた活動に女子が参加するようにもなっている。しかし逆に過疎化と少子化が進んで忘れられる古い遊びやわらべうたを残したいと、各地で子どもの文化を保存する運動も生まれている。

スポーツも変貌している。相撲界では新弟子数は、92年をピークに減っている。中学、高校の運動部の廃部は深刻である。また、それには少子化による教員の補充不足、指導者の教員の高齢化も一役買っている。従来の学校単位のスポーツチームの編成がむずかしくなっているので、複数の学校でチームを形成する例も出ている。高校野球でも試合には他のクラブの部員を借りてきたり、また、部員不足で出場辞退という例も出ている。一方で、選手集めに県外に出る高校もある。中学軟式野球の全国大会には96年から部員不足のため女子が出場できるようになった。

また、動物ペットの需要が増えている。高齢社会や少子家庭の心の空白を埋める役割を犬たちは果たしている。彼らは家族の一員として迎えられていることが多い。さらに、犬に限らず、猫や小鳥、熱帯魚などがコンパニオンになっている。アニマルセラピーの試みもなされている。

従来男性の領域であった仕事が男性不足で女性が進出する。女性が社会進出できる環境

が整備されるにしたいが、働く女性が途中で姓を変えると不都合を生じかねないので夫婦別姓が望まれる。また、少子化で長男長女の結婚が増え、姓の選択を必要とする人は少なく、これも夫婦別姓の実現を促進するものとなっている。

長男が老親と同居するという慣行が少子化のために実現が困難になっている。娘しかいない老親は長女と同居する者が増える。老親から見た場合に子どもとの同居率は低下していくが、子どもから見た場合には老親との同居率は上昇していく。今はライフスタイルの選択肢として、同居が忌避される風潮にあるが、これから高齢化と少子化により、むしろ同居が選ばれる可能性もある。

少子・核家族化がすすむ中で、老後への考え方が、個人の尊厳や自立的生活を最優先する欧米型に変わりつつあると考えられる。それは一人暮らしの増加に象徴的に表れている。また、孤独な老後にしないよう仲間づくりが進められている。生涯学習が年々盛んになってきているひとつの要因が少子化であるかも知れない。

墓のありようも変化している。少子化のため現実問題として、墓を代代守っていくことが困難になってきた。本来どう生きて、どう葬られたいかは、きわめて個人的な問題であるが、大きな社会問題になっている。たとえば、生きているうちに自分の墓を建てる「寿陵（じゅりょう）」が最近増えている。寿陵は「長生きができる」などと、もともと縁起のいい風習として知られていたが、最近では自分の墓のことで子どもに迷惑や負担をかけたくない、と考えるために作られることも多い。

また、少子化で今後ますます墓や仏壇を抱えた者同士の結婚が増えてくる。長男長女同士の若いカップルが、お彼岸に2カ所の墓参りに行く者も増えてきた。そんな中で、夫側の家名と妻側の家名の両方を刻んだ「両家墓」も増えつつある。また、死後の灰を自然や海に返す自然葬も人気が出てきているが、核家族や少子化、高齢化の進展で墓を守るのが困難になったことも関係があるだろう。さらに、少子化で無縁仏が増えているという。

少子社会の今日、特に地域において、人と人の関係づくり、新しい形の情緒的・感情的連帯から生まれるコミュニティづくりが徐々に生まれていると思われる。日本はこれまで他者との間を切断する方向に進んできたが、少子化と高齢化は、地域社会を他者へのかかわりや思いやりの心を必要とする時代に変えつつあると言えるだろう。